

# 米沢有為会 東京支部だより

発行／(公社)米沢有為会東京支部 発行人／加藤 国雄 発行日／平成27年8月10日  
〒182-0004 東京都調布市入間町1-3-6 東京興譲館内 TEL/FAX 03-3309-3302  
東京支部ホームページ [http://www.yonezawa-yuukai.org/tokyo\\_shibu/](http://www.yonezawa-yuukai.org/tokyo_shibu/)



東京支部総会 笑顔の記念写真



東京支部新年会卒業寮生を囲んで



東京支部定期総会 寮生勢揃い



ふるさとへの思いを「かたち」に  
新支部長としてのご挨拶

東京支部長 加藤 国雄

私、この七月、東京支部長を仰せつかりました。私は、昭和39年に当会運営の寄宿舎・東京興譲館に入舎し、新宿区の旧寮と調布市の現寮の両寮で学生生活を送りました。学生としてお世話になった私が、米沢有為会の運営側になって十数年になります。これまでは本部署として、育英事業や広報（ホームページ）など、主にインターネット上でできる業務を担当してきました。この十年近く続いた大阪での仕事から解放されたこともあり、もともと人と交わるこの職務をお引受けさせて頂きました。前支部長の米野宗禎さんは、人的ネットワークの広さをベースに「文化大学」を定着させるなど、支部活動の活性化をすすめられました。そのご貢献への感謝の意を表します。（今後は学長として継続されます）私は米野さんのように参りませんが皆さまお力をお借りしながら務めたいと思います。当会の活動目的は、明治22年の有為会設立の起源にたどれば、ふるさと米沢（置賜）を離れた同郷人の連帯・切磋琢磨と、ふるさと支援にあります。現在の当会活動に照らせば、ふるさと支援は当会の育英事業（寄宿舎運営、奨学金貸与）などであり、同郷人の連帯の基盤が支部事業とあります。我々東京支部会員が共有するものは、「ふるさとへの思い」です。個々人のその思いを集約し、「かたち」にするのが機関としての支部の役割と思に至りました。東京支部の主な行事は三つの定例会（新年会、総会、園遊会）、文化大学

（本部との共催）、各種同好会（俳句など）ですが、「米沢有為会の魅力が少ない」とのご指摘もお聞きます。そこで会員の皆さまから新たな催しの思い付きをお寄せいただき、それを米沢有為会が信用力、経済力（？）そして持っている人材をつかって個人レベルではできない催しなどの「かたち」にしてゆけないかと考えます。故ケネディ大統領風に言えば、「会員が会に何が出来るかを考えて欲しい」となります。例えば、普段は個人では入れないところや見られないものを「探検バクモン」や「ぶらタモリ」風に米沢有為会として見学するのはどうでしょう。また、私は上杉鷹山の米沢藩財政再建を計量的に分析したいと思っていますが、このように上杉鷹山公の業績を現代風に多面的に考える集まりを作るのはどうでしょう。昨今「地方消滅」が話題ですが、我がふるさとも例外ではありません。ふるさとの過去・現在・未来をさらに知り、考え、できれば何らかの貢献につながる催しを企画してゆければと考えます。現役のビジネス・パーソンにも参加を促したいと思えます。皆さまのアイデアを事務局へメール（次アドレス）やFAXなどでお寄せ下さい。  
jimkyoku@yonezawa-yuukai.org  
（略歴）昭和21年米沢市生まれ。米沢興譲館高校卒、元・野村総合研究所取締役、元・大阪経済大学専任教授（金融工学）

# 支部総会において新理事が承認されました。

(6月14日(日)開催)

## 留任理事

伊藤 貞治  
加藤 国雄

川合 勝雄  
川井 陽一

倉田 和子  
鈴木 信之

鈴木 吉助  
滝澤 昭義

中川 紘一  
羽隅 弘宣

平山 英三  
平山 和博

宮坂 孝夫  
吉澤 雄一

渡邊 忠義

五雲寺 卓

太田ひろみ

佐藤 憲一

林 常子

板垣 史朗

佐藤 好明

留任監事

赤井 淳一

佐藤 和彦

退任理事

飯沼 俊男

伊藤 喜助

紺野 耕

沼澤 研一

樋口 正宏

米野 宗禎

## 諮問委員

青木 恵子  
安部 壯一郎

安部 忠彦  
安部 洋司

伊藤 隆明  
今井 浩之

遠藤 弘隆  
大石 道夫

神野 民夫  
金藤 泰伸

近藤 郁子  
佐藤 孝夫

佐藤 毅  
鈴木うめよ

橋本 享子  
樋渡 三保子

深沢 和子  
山村 浩和

山村 雅宏

山田 幸生

諮問委員は9月30日までの任期です。

**新支部長・副支部長**  
7月26日の第3回理事会において、理事の互選により支部長に加藤国雄理事、副支部長には鈴木信之・川合勝雄理事が選出されました。  
退任された理事の方々には長い間有り難うございました。

## 東京支部 新年会・予餞会

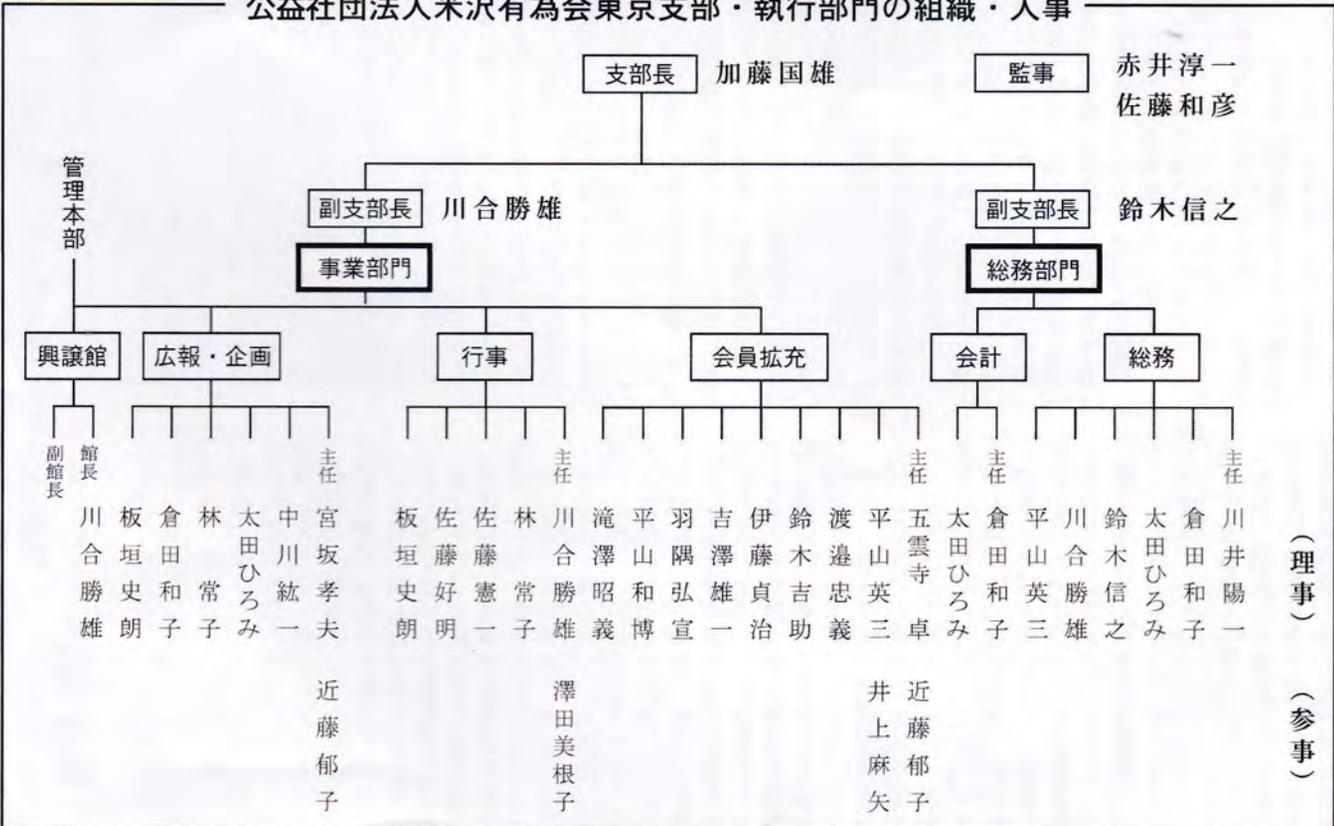
二月七日に「スクワール麹町」で、出席者六十名の会合となりました。伊藤秀太郎理事の司会で米野支部長の挨拶の後、上杉邦憲名誉会長さらに須貝有為会長よりご祝辞を頂きました。館長より今年の卒業生は、全員進路が決定の報告がありました。その学生に、自己紹介と抱負を述べてもらいました。興譲館寄宿舎OB会長の佐藤毅様から卒業生に対する激励の言葉を頂きました。米野支部長から卒業生に記念品の贈呈があり、卒業舎生を代表して本田健太郎君が謝辞を述べました。  
その後名誉会員下條泰生様ご発声で乾杯し祝宴に入りました。鈴木信之副支部長の中締め挨拶で終了しました。  
(川合記)

## 訃報

前東京支部長・支部相談役、清野文男さんが七月九日お亡くなりになりました、八十四歳。  
S25、米沢工業卒、建築関係のNSK株の社長として数年前まで活躍された。趣味は絵画、有為会120周年記念の年にはチャリティー絵画展を企画実行され、有為会の為

に多額の寄付を集められた。今年、自宅を改築されたそう  
で、永年の夢、ご自分のアトリエを作られたが、一度も使うことがなかったと奥様からお聞きしました。  
米沢有為会における永年のご功績に感謝し、ご冥福をお祈りします。

## 公益社団法人米沢有為会東京支部・執行部門の組織・人事



平成二十七年東京支部  
総会と懇親会・歓迎会

六月十四日(日)スクワール麹町

第一部の「定期総会」は沼澤研一副支部長が議長となり平成二十六年度の事業及び決算報告、平成二十七年の事業計画(案)及び予算(案)が承認されました。また理事・監事任期満了に伴う改選案も承認されました。

第二部の「懇親会・歓迎会」はご来賓の上杉邦憲名誉会長と須貝英雄会長よりご祝辞を頂きました。その後、新入舎生七名の自己紹介と抱負を述べてもらいました。

さらに長年(株)富士通の第一線で活躍して来られた、五雲寺卓様からも学生に対して、「コミュニケーション能力の向上と学生・院生時代に見つけることの大事さと寮で過ごせることに感謝の気持ちをもちなさい」と励ましの言葉を頂きました。

続いて、名誉会員の下條泰生様のご発声で乾杯し懇親会に入りました。鈴木信之副支部長の一本締めで盛況のうちに終了しました。(川合記)

東京興譲館寮 新入舎生名簿 平成27年4月現在

	氏名	大学・学部・学科	学年	出身高校	出身地
1	三浦 啓希	早稲田・大学院文学研究科	M1年	山形東	山形市
2	チョウ・イサク	桜美林・リベラルアーツ	2年	基督教独立学園	墨田区
3	遠藤 勇太郎	国士舘・文	1年	日大山形	山形市
4	加藤 翔	慶応・商	1年	米沢興譲館	米沢市
5	上村 勇貴	東京学芸大・教育	1年	米沢興譲館	米沢市
6	鈴木 千畝	東京学芸大・教育	1年	山形南	東根市
7	我妻 裕哉	城西国際・経営情報	1年	米沢興譲館	米沢市

平成27年新奨学生 今年下記4名の学生が新たに選抜されました。

	氏名	大学・学部・学科	学年	出身高校	出身地
1	大河原 和馬	東北大学経済学部	1年	米沢興譲館	米沢市
2	田中 一成	中央大学法学部	1年	山形東	南陽市
3	伊藤 誠	上越教育大教育学部	1年	米沢東	米沢市
4	渡邊 志保	静岡大農学部	3年	米沢興譲館 米沢女子短大	米沢市

申込の際提出された作文「私の志」の抄文を掲載します。若者たちの夢の実現を支援して下さい。



大河原 和馬

我が国の地方都市は若者の首都圏への流出が続き、地方の経済力が低下が日本経済を弱くしていると考えます。私は大学卒業後、県または市の職員として就職し、山形・米沢の発展に寄与したいと考え、具体的な方策を大学生生活で模索したい。



田中 一成

私の夢は弁護士になることです。中学1年の時、宇都宮健児弁護士の本に出会い、弱者の盾となつて立ち向かう姿に感動したのがきっかけとなりました。中学・高校を通し様々な法律家のお話しを伺い、弁護士として働きたいという気持ちが固まりました。中央大学に進み一刻も早く弁護士になるべく励みたいと思います。



伊藤 誠

私の目標は教師または臨床心理士になることです。私が受けた「いじめ」を通し、



渡邊 志保

現代の子供達の「負担」が大きくなっていることに気がつきました。また、私を心配して頂いた担任の先生をはじめ色々な方々の支えを忘れず、今度は私が悩み苦しむ子供の為に手助けしたいと考えています。

私は短大で食や健康について学んだが、もっと深く学び研究したいと思い、農学部への道を選んだ。大学では食品・作物のみならず微生物の有用性とその応用について研究したい。卒業後も研究者となり、新しいものを生み出すことで、人々に生活を向上させることに貢献したい。



寮生と有為会役員

第14回文化大学

4月19日(日)

於・東京米沢興譲館寮

出版界の草分け『博文館』と

大橋乙羽の物語り(米沢、音羽屋旅館生れ)



博文館新社四代社長

大橋一弘

(乙羽の孫さん)

米沢が生んだ文豪、大橋乙羽は明治2年6月4日、米沢の立町にあった旅館音羽屋、渡部治兵衛の六男として生まれる。

本名を又太郎、雅号は音羽屋に因んだ「乙羽」。興譲小学校卒業後、父の知人、呉服商富士屋に見習いとして勤めながら、お寺に通い漢学・漢詩を学び文才を養う。

明治21年7月15日、磐梯山の噴火が起こった。その日偶々小野川に宿泊していた乙羽は直ちに吾妻を越え、会津の現地に赴き生々しい惨状を記事にして出羽新聞に発表。これが米沢出身の出版社東陽堂社長の吾妻健三郎の目に止まり同社に入社。



大橋乙羽・時子ご夫妻

明治21年9月上京。同月処女作「美人の佛(おもかげ)」を刊行、明治25年、博文館の少年文学に上杉鷹山公の伝記を掲載したところ同社主人の大橋佐平にその才能を買われ、同社に移籍、長女時子と結婚。

博文館入社後、専務理事として数々の出版を企画、当時の大衆雑誌「太陽」「文芸倶楽部」等の企画や編集に関わり、樋口一葉、巖谷小波、高山樗牛等の作品を紹介した。ヨーロッパ取材旅行の後、体調を崩し明治34年6月1日32才の生涯を閉じた。

郷土を愛した乙羽の遺言により興譲小学校に500円、東京養老院、東京盲啞学校にそれぞれ1000円という大金を寄付した。

人格高潔にして、文才あり己の作品のみならず、樋口一葉らの文人を発掘し、また企業経営にも手腕を奮い、義父の期待に応え初期博文館の発展に貢献した。短い生涯ではあったが、文学界に大きな足跡を残した。

明治21年9月上京。同月処女作「美人の佛(おもかげ)」を刊行、明治25年、博文館の少年文学に上杉鷹山公の伝記を掲載したところ同社主人の大橋佐平にその才能を買われ、同社に移籍、長女時子と結婚。

第15回文化大学

7月5日(日)

於・東京米沢興譲館寮

「農との出会い」

有機農業の里、高島で神奈川の高校生が学んだこと



北里大学教授

川井陽一

ご紹介いただきました川井です。高島町に生まれ育ち、大学入学後二年間東京興譲館でお世話になりました。

大学卒業後は神奈川の県立高校で教職に従事しました。本日は、その間、神奈川県立神奈川総合高校(以下、「神奈総」と略します)に勤務していた時に、私自身が企画、実施し、今年で二十年目を迎える同校の高島町における農業体験研修旅行を柱に、農と教育について私の考えていることをお話しさせていただきますと思います。

私たちの生命を支える食べ物、その食べ物の多くは農業に依拠しています。農業は、いわば、人間の「いのち」そのものを支える大切な役目を果たしています。しかしながら、昨今多くの人々は、農業への関心が薄く、また生産者の苦勞に思いを馳せることが少ないのが現実ではないでしょうか。「農への無関心は、いのちへの無関心と同義」という山下惣一の言葉を私は重

く受け止めています。

私が高島での農業体験研修旅行を企画したのは、都会に住み日頃農業とは縁遠い生活を送っている高校生が、農という営みをおして「食」や「環境」、さらには「いのち」や「豊かさ」について考えてほしいということが主な狙いでした。

実際、高島での研修旅行は所期の目的を達成しており、すし、さらには、「共生」について考えたり、「生き方」そのものを問う直す生徒さえいます。毎年発行している記録集に寄せられた生徒の感想は、この研修旅行のもつ高い意義を示しています。

多くの成果を得ている理由は、舞台としての高島町、そして「神奈総」にあると考えられています。最初に高島町について触れま

す。高島町では、一楽照雄氏らが中心になりわが国の有機農業が開始された二年後の1973(昭和48)年に有機農業への取り組みが始まりました。

た。「神奈総」の研修旅行でも毎回講演をお願いしている高島町の有機農業のリーダーで牽引者でもある星寛治氏が中心となり、四十年以上におたり有機農業への取組が行われています。

有吉佐和子が高島での取材をもとに星寛治氏らの取組を『複合汚染』で詳しく紹介しているのは、高畑勲監督の映画「おもひでぼろぼろ」では、有機農業に取り組む主人公トシオが高島の青年をモデルに構想され、また近年では、原剛編の『高島学』(藤原書店)が出版されていることから窺えるように、高島町はわが国の有機農業の先進地であり、中心地です。農業体験研修旅行には誠に相応しい地、それが高島町なのです。

一方、「神奈総」すなわち神奈川県立神奈川総合高校は、1995(平成7)年創立の全日制・普通科の単位制高校です。学年の区分を設けず、生徒が自らの進路や関心に応じて時間割をつくる、大学の学びのようなスタイルの学校です。生徒の自主性を尊重し個性の伸長を重視している点にも特徴があります。

私は県教委の準備室で「神奈総」の設立準備に当たり、開校と同時に教諭として着任し、同校の立ち上げに深く関

# 同好会活動

## 俳句同好会

### 「漆の実」

兼題 毛虫・プール／席題 熱帯夜

主幸  
鈴木淳一

戦争論議真っ只なかの毛虫焼く

プール開き黒禪赤禪を飛びこます

ラヂオからボサノバ流る熱帯夜

学校のプール懐かしカルキ臭

夜半の月プールの面を押し照らし

プール深く少女発泡しつっ墜つ

闇走る汽笛身近や熱帯夜

軍医総監然れど中尉鷗外忌

熱帯夜井戸水夕オル首手足

池田弁之助  
太田甘美

片山丹波

下條怡生

小山八州史

中川はじめ

登坂かりん

松坂六義

## 短歌同好会

### 「古今小杉短歌会」

母の忌に行かぬと決めた午後庭 師・歌人

葉擦れの音に涙こぼるる 香川三枝

めずらしく鳥すら啼かぬわが町よ

鳥らはどこか春の遠足 吉田数馬

よく観ればひそかに揺るる本の葉らよ

五月の風に心地よきささふ

空もよう鉛色でも降らぬ雨

なま温い風顔を撫でたり 鳴貫昭雄

庭先のグレープフルーツの花びらは

薫風に舞ひ香りを散らす

わかりました。他校での修学旅行にあたる「神奈総」の研修旅行は、いくつかのコースから生徒が選択し参加します。



現高校教諭のお嬢さんも講演助手としてお手伝い

研修旅行と称しているのは、事前学習を積み重ね、実施後は事後学習を行い、まとめの冊子を発行する、そうした一連の内容からきています。

たとえば、高島の研修旅行では、星寛治氏の『有機農業の力』は全員必読でし、「おもひでぼろぼろ」も事前に鑑賞し、終了後は毎年充実した記録集を発行しています。研修旅行の内容ですが、農家に三泊し、農業体験や農家の方との交流により農業への理解を深めています。研修旅行参加後に再び援農に訪れたり、お世話になった農家の方と引き続き交流をもつ生徒も少なくありません。高島町という舞台、町を挙げ

郁子って名前の所以を尋ねれば

馥郁だからぼそつと父云ふ

近藤郁子

この年齢になっても知らぬ事多く

スマホにそつと訊いてごまかす

ふるさとは命あふるる春の山

恵みいたただき元気をもらう

樋渡三保子

注ぎたるビールの泡をみつめたり

人生のごとく光りては消ゆ

てのご支援、そして意欲的、積極的に農業体験に参加する「神奈総」の生徒たち、その幸福な出会いが、二十年にわたり多くの成果と共に続いていく理由かと思えます。ちなみに「神奈総」では、沖繩や関西等への研修旅行よりも農業体験の研修旅行に人気があり高島だけでは収容できず現在、高島、長野県、北海道の三カ所です。本日は、「おもひでぼろぼろ」の映画の一部をご覧いただいたりしながら、私の体験を踏まえ、農と教育について話をさせていただきました。「農は自然を耕し、教育は人を耕す」という言葉を聞いたことがあります。農と教育に共通するキーワードは「耕す」かもしれません。有機農業は土づくりが基本です。人間も土台が大切なこととは言うまでもありません。今後の時代にあつて、最先端の「人工知能」について、教育の分野でも真剣に考える必要があると考えています。一方で、人間の生の根源であり、教育とも深く関わる農業について、教育に携わる者は、大いに考える必要があると思っております。本日は貴重な機会をいただきました。うございました。

新会員 自己紹介



宮島 大介

「米沢との縁」

米沢有為会の皆様初めまして、入会のご挨拶をさせていただきます。

私は、東京都渋谷区代々木在任の宮島 大介と申します。私は1946年（昭和21年）7月生まれで、間もなく69歳になります。

私は4年前に43年のサラリーマン生活から退職をして悠々ではありませんが、自適な時間を持てるようになりまして。今まで、米沢有為会のこと全く知りませんでした。此の度千葉県にご在住の関口真博様のご紹介で知り得て、入会をさせて頂きました。

私は、米沢藩士・宮島誠一郎の曾孫です。米沢の地は旅行以外ではほとんど知りません。生まれは神奈川県逗子市で、小学校入学時に現住所の代々木に転居して以来約60年当地に住んでいます。転居当時（1953年・昭和28年）のJR代々木駅前未舗装砂利道で、町も長閑で明治神宮も近く、のんびりしていました。1964年（昭和39年）の東京オリンピックを契機に

大きく変わり、また各種学校が多くなり、今に至っています。これから2020年開催予定の東京オリンピック・パラリンピックに向け更に変貌を遂げるのではないかと思いますが、住人である私は慣れ親しんだ代々木が大きく変化して欲しくないと思っています。

私は前記のとおり逗子生まれですが、本籍地は当初米沢市猪苗代片町であった。米沢や自身のルーツの事は、今まではあまり意識をした事が無く無関心でしたが、これからは米沢有為会の諸先輩にお教え頂き少しずつですが、意識を深めていきたく思います。

今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

「こまつ座とわたし」



井上 麻矢

「こまつ座とわたし」

こまつ座は父・井上ひさしと母・西館好子（当時は井上好子）が立ち上げた劇団で、それは私が高校1年生の頃の事だったと記憶しています。

父の書いた戯曲を上演することを目的とした、その頃には珍しいプロデュース公演という制度を導入したパイオニアでもあります。（※プロデュース公演とは、劇団員を抱えず演目毎に都度劇団員を集める方式。）

旗揚げは私が高校一年生の時でしたが、その準備には何年もかかりました。当時小学生の私が学校に行く準備をする朝まで連日のように会議は続き、徹夜明けの両親と会話したことは思い出に残っています。

劇団は当初、父の故郷である山形の羽前小松あたりで劇団を旗揚げしたいと思っていたそうです。

『もうそろそろ、東京から地方へという当たり前の流れではなく、地方から東京へと面白いものが流れてもいいはずだ。』という父の若き日の燃えたぎる覚悟を感じ取れる言葉と思えます。父の地方からの視線を忘れたことのない作家である萌芽はこのころにはすでに確立しており、その根が小説や戯曲に影響したことは言うまでもありません。

私は劇団を立ち上げるといふ歴史的瞬間にたまたま立ち会うことにたりしましたが、その時に感じた興奮はよく覚えています。

劇団というのはけっしてアナログにはなりません。人と人の摩擦が前進するためのエネルギーなので、パソコンでのやり取りだけでは成り立たない、電話だけでも成り立たない、会って話し合わないで解決しない業種でもあります。そのため大抵の方は声を痛め、健康を害し、そしてこの業種を職業として選ぶことに躊躇します。

私の中にはどうやら劇団の血のようなものが流れているらしく、落ち込むことはあっても辞めたいと思つたことは一度もありません。お芝居は見なくても死なないといふ言葉が、確かに心に不景気になると真つ先に削られてしまうのが芝居のチケット費用なのでしょう。

どんなにいい芝居もお客様がいないのは何の意味もありません。最後の一番いいところをお客様に作っていただくのが芝居の醍醐味なのかもしれません。

この醍醐味を知って頂くために私たちは今日も芝居を作っているのです。

そして私にとって劇団こまつ座はひとことで現せば『ふるさと』そのもの、両親と過ごした幸せな記憶と共にいつもあり続ける素敵な空間そのものなのです。



渡辺 光子

米沢有為会の皆様、こんにちは。渡辺光子です。この度、米野宗禎東京支部長のお薦めで入会させて頂きました。下條泰生前会長は鎌倉市で市民活動を共に続けた友人です。

私は仙台で生まれ育ちました。米沢の皆様とは伊達政宗公以来のご縁ですね。18歳で一人上京し、寮生活をしながら大学で学びました。親は仕送りで苦勞したことでしょう。ですから、会員から寄付を募り、奨学金や学生寮の運営を120年以上続け、有為の青年を育成してこられた米沢有為会のご活動に深い感銘を受けております。

「人は一人では生きられない。力をあわせ助け合ってこそ心豊かな人生、社会である」というのが私の信念です。どうぞよろしくお願ひ致します。

津田塾大学学芸学部卒  
法政大学大学院修了博士（政治学）  
生活クラブ生協支部委員長  
横浜ゴミを考える会 代表  
たすけあいワーカーズ  
「ふれあい」設立・理事  
鎌倉市民フォーラム・代表  
神奈川県議会議員  
宮城県環境生活部長  
日本景観学会理事  
鎌倉市山ノ内在住

寄稿

東京支部・米沢有為会「史談会」研修会

「上杉齊憲公の復権運動と宮島誠一郎」

七月十一日(土)午後、米沢の先人たちを偲ぶ史談会の研修会が開催され「上杉齊憲公の復権運動と宮島誠一郎」と題する講演が行われました。

講師は『戊辰雪冤―米沢藩士・宮島誠一郎の「明治」―』(講談社現代新書、二〇〇九年)や『未完の国家構想―宮島誠一郎と近代日本―』(岩田書院、二〇一一年)等で宮島誠一郎の活躍をお書きになつてゐる東北大学東北アジア研究センター助教の友田昌宏先生です。

会場には、宮島誠一郎の長男で書聖といわれ、父とともに日清関係の改善に努めた大八が創立した代々木の中国語学校・善隣書院の教室をお借りしました。

当日は、当会名誉顧問の上杉邦憲氏、宮島誠一郎の関係者の方々、平田東助伯爵の子孫等二十名が集いました。

開演に先立ち初対面の名刺交換も行われ、上杉名誉顧問は友田先生をご覧になるや「こんなに若い方が立派な成果を挙げて」とビックリされて

いましたが、一時間半に亘る先生の講義には皆さん熱心に耳を傾けていました。

今回の研修会に当たり友田先生には本文レジュメと参考資料の二種類の資料を御準備いただき、これらに沿つて講演は進められました。

以下、講演内容の概略を記してみましよう。

米沢藩主上杉齊憲公は戊辰戦争では奥羽列藩同盟の盟主として新政府軍と交戦、敗れて朝敵として官位をはく奪され隠居を命じられますが、米沢藩の汚名を雪ぐために、この齊憲公の位階を昇進させるべく影で新政府の要人に働きかけたのが宮島誠一郎です。

宮島誠一郎は右筆宮島一郎左衛門の長男として生まれ幼少から秀才の誉れが高く、長じて藩の周旋方として江戸・京都で情報収集に努めた人物で、維新後は新政府に登用され立憲政体の樹立を求めて政府に「立国憲議」を提出するほど先見の明があった人物です。

宮島は「影の男」をもつて

自任し表に出ることはほとんどありませんでしたが、周旋方であったことから勝海舟をはじめ交友範囲はきわめて広く、齊憲公の位階昇進にあつてはその人脈が駆使されました。宮島は米沢藩の藩政改革や館山製糸場建設を推進するなかで齊憲公を前面に押し立て、公を三条実美や大久保



利通等に引き合わせ、功績をアピールすることにより復権をはかりました。

その結果、明治十一年に齊憲公は従五位から正五位に昇進し、以後昇進をかさね最終的には従三位まで上りつめます。ここに宮島の努力は報わ

れたのです。

二十二年に齊憲公が急逝され、一周忌を過ぎたころからその功績を称える碑の建立計画が起こり宮島はこの計画に深く関わるようになります。

宮島は一か月間休みなく碑文の起草に従事し、当初五百字程度とされた碑文は、この碑の完成を復権運動の総決算と考える彼の熱意に比例して千二百字を超えるものとなりま

したが、勝海舟の閲覧を経て完成し、米沢南境の吾妻山麓の横川から運んだ巨石に有栖川宮熾仁親王揮毫の題字により「従三位上杉曦山公之碑」と彫刻され、二十四年九月上杉茂憲・憲章父子の臨席のもと建碑式が行なわれました。

先生のお話では「復権運動」については『戊辰雪冤』に沿つたものであるが、碑の建立についてはその後さらに研究を進めたもの」ということで、参考資料として碑の全文翻刻・読み下し文・現代語訳を八ページに亘り写真入りで送っていただきました。

最後に最近米沢女子短大で同様の講義を行った際の学生達のユーモアある感想文の披露があり「若い人たちに宮島という人物がいて米沢のため

も知ってもらえれば幸い」として締め括られました。

講演後、質疑応答や平田伯爵のご子孫義倫氏による平田伯爵が留学されたドイツの大学の想い出話等があり、更に席を近所の中華料理店に移して懇親の場が設けられ、上杉名誉顧問の乾杯の発声のもと餃子や焼きそばを肴に和気藹々とした時を過ごしました。

そして、「もう少し時間が欲しかった」という会員の言葉が示しますように研修会は成功裡に終わったのでした。

当日の友田先生が作成された配布資料は東京興譲館図書室に配置してありますのでご来館の節ご覧下さい。

(関口真博記)

ご子孫をご存じないですか？

友田先生が研究対象として取り組んでいらっしゃる「雲井龍雄」に関連して東京谷中に雲井の墓碑を建立した下記三名のご子孫を探していただければ幸いです。

- 杉原謙・東京横濱毎日新聞社仮編集長  
杉原(水原)親憲の子孫 親憲や苅戸太華の伝記著者
- 宇加地新八・陸軍軍人で明治七年に議会開設  
台湾出兵反対意見を提出
- 山下千代雄・弁護士で自由民権運動に挺身した政党政治家

※ご連絡は有為会アドレス:jimukyoku@yonezawa-yuukai.org

調  
布  
散  
歩

産経新聞 7月24日(金)より転載

### 東京 おでかけ日和

白樺派の作家、武者小路実篤（1885～1976年）が晩年の20年を過ごし、多くの作品を生んだ仙川（東京都調布市）。文豪が愛した街は、若者が集い才能を育む場として成熟を続ける。

### 若い才能を育む街

新宿から京王線に乗って仙川駅で下車。南側に延びる商店街を抜けると、指揮者の小澤征爾さんら国際的に活躍する音楽家を多く輩出する桐朋学園に行き着く。

### 文豪・武者小路実篤が愛した仙川

さらに西へ数分歩くと、住宅街の中に森が現れた。実篤が「仙川の家」と呼んだ邸宅の敷地を公園として公開した「実篤公園」だ。公園内にはいくつもの池があり、今も水が湧く。武者小路実篤記念館の学芸員、石井めぐみさんは「水の湧く庭のある家に住むのは長年の夢だったそう。彼はここで充実した日々を送り、地元の人にとっても愛されていました」と教えてくれた。



実篤公園内の竹林  
—東京都調布市

へ。実篤が描いたカボチャの絵を基に創作した「かぼちゃ菓子」などを購入し、近くの洋食店「アンカーヒア」に入る。

店の名は「『ここにいきなりを下ろす』『いきなりを上げ発する』という意味です。集う人が立ち立ち、そしていつまでも戻って来られる場にしたかった」とオーナーの桃沢俊夫さん（72）。その言葉通り、桐朋出身のバイオリニスト、古沢巖さんやチェリスト、宮田大さんらは学生時代、ここで食べ、練習し、巣立っていった。今も時々戻り、迫力の演奏を間近で聴けるミニコンサートを開催する。建築家、安藤忠雄さん設計の「せんがわ劇場」も若手の音楽家や新進の役者らの舞台だ。楽器を背負った桐朋生とおぼしき女子たちが「せんがわ劇場でいつか演奏会を開きたいね」と話しながら歩いていた。

### 園遊会のご案内

日時：平成27年11月1日(日)

午後12時30分～3時

会場：小石川後楽園・涵徳亭

多数のご参加をお待ちしております。

### 文化大学のご案内

第16回

演題：無私の人「池田成彬」ソープに学ぶ

講師：種村 信次 米沢信用金庫 会長

日時：平成27年9月26日(土) 午後2時～

第17回

演題：基礎科学と社会

講師：西村 純 東京大学名誉教授

日時：平成27年11月15日(日) 午後2時～

会場はいずれも東京興譲館寮

### 編集後記

▼今年には終戦70周年、戦後生まれが人口の大半となりつつあるが、戦中・戦後の記憶は未だ多くの人が共有して知らない一方、戦中・戦後の貧しさ人達が現在の日本文化を創る主流になりつつある。

▼有為会の会員構成は昭和45年以後に生まれた人は未だ少数派だが、新陳代謝は確実に進行する。有為会の「在り様」・「存在意義」も時代とも変わって行く。ある日、若い世代の人達が問題を意識し議論することになるが、それはそれほど遠くないことだろう。

▼今回の文化大学は出版業界を取り上げた。博文館は一弘氏の祖父乙羽の義父、大橋佐平が明治20年（1887）創設した戦前出版業界の巨人である。総合雑誌「太陽」は同社隆盛のシンボルで昭和3年まで531号を数えた。往時関連グループ会社は数百を数え、現在も尚活動続ける上場企業もある。戦前の国粋主義的イメージが災いし戦後、会社を分解することになるが、博文館の伝統的出版物「日記」は一弘氏が社長をされている博文館新社に継承されている。

▼こまつ座の運営に日々ご苦労されている井上麻矢さんが会員になられた。井上ひさし氏もやはり戦中戦後の時代の人だと思ふ。氏の演劇の題材は幅広いが、その底辺にあるのは戦後の貧しさから立ち上がるうとしていた日本人が持っている勤勉と不屈の精神文化の確認であり、それは自他を励ます応援歌ではなからうか（中川記）

### 編集委員メンバー

- 委員長……………中川 紘一
- 米野 宗禎/加藤 国雄
- 鈴木 信之/倉田 和子
- 太田ひろみ/濱田 吾愛
- 近藤 郁子/宮坂 孝夫
- 川合 勝雄/板垣 史朗